

埼玉県熊谷市埋蔵文化財報告書 第29集

北 廓 遺 跡 Ⅱ

2018

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財報告書 第29集

きた ぐるわ い せき
北 廓 遺 跡 II

2018

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷は、原始・古代の集落跡等の埋蔵文化財が数多く分布することで知られています。こうした埋蔵文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証であるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。

しかしながら、近年においては、多くの開発行為に伴い、我々の郷土の景観は日々変化しております。このような現状の中で、失われつつある文化財を保護し、それらを次世代に伝えていくことは我々の大きな課題であり、責務であるはずで

さて、今回報告する北廓遺跡は、熊谷市箕輪地内に所在する縄文時代から平安時代の遺跡であります。過去に旧大里村教育委員会による発掘調査が実施され、当時の人々の生活が分かるものが成果として確認されております。

この度、この遺跡の一部で集合住宅の建築工事の計画が持ち上がりました。熊谷市教育委員会では、遺跡の保護と保存についてその関係者との間で協議を重ねた結果、熊谷市教育委員会で記録保存のための措置を講ずることとなりました。

本書は、平成28年9月26日から10月7日にかけて実施された記録保存のための発掘調査の成果をまとめたものでございます。

本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発として広く活用されることとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を御理解、御協力を賜りました福田敏博氏、並びに地元関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成30年3月

熊谷市教育委員会
教育長 野原 晃

例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市箕輪字北廓47番1、48番1の一部に所在する北廓遺跡（埼玉県遺跡番号64-18）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査届出に対する埼玉県教育委員会からの指示通知は、平成28年8月18日付教生文第4-499号である。
- 3 本調査は、集合住宅造成に伴う浄化槽埋設部分の事前の記録保存のための発掘調査であり、その調査は熊谷市大里地区遺跡調査会を設立し、調査会が実施した。また整理作業については熊谷市教育委員会が作業を行った。
- 4 本事業の組織は、I章のとおりである。
- 5 発掘調査期間は、平成28年9月26日から平成28年10月7日までである。
また整理・報告書作成期間は、平成29年4月3日から平成30年3月26日までである。
- 6 発掘調査は腰塚 博隆がおこなった。
本書の執筆・編集は熊谷市立江南文化財センター内作業員の協力のもとに腰塚がおこなった。
- 7 写真撮影は、発掘調査、遺物ともに腰塚がおこなった。
- 8 出土遺物は、熊谷市教育委員会で保管している。
- 9 本書の作成にあたり多くの方々から御教示、御協力を賜った。記して感謝いたします。
(敬称略 五十音順)
埼玉県教育局生涯学習文化財課
根岸 友憲
熊谷市立吉見小学校

凡 例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

- 1 本文中、遺構の表記記号は、次のとおりである。

S I…住居跡、P…ピット

- 2 遺構図面中の表記記号は、次のとおりである。

S…川原石、P…遺物

- 3 遺構挿図の縮尺は、次のとおりである。

遺構全測図… 1/150、各遺構…原則 1/60、ただし一部に限り縮尺が異なる。

- 4 遺構土層断面図及びエレベーション図のポイントの標高は、原則として同一図版、同一遺構の標高は統一し、Aポイントに表記した。なお、例外的に標高差が大きい場合は、統一せずその都度表記してある。

- 5 遺物実測図の縮尺は、1/4である。ただし、一部においてはその限りではない。

- 6 遺物実測図の中で、中心線はすべて実線で示し、遺物観察表にできる限り残存率で示した。

表現方法は、原則として須恵器のうち還元焰焼成の断面は黒塗り、須恵系土師質土器（酸化焰焼成）は表記を土師質土器とし、断面は白抜きで、灰釉陶器以外の土師器等の土器、その他の遺物の断面は白抜きで表した。

それ以外の土器器面等の表現である釉薬、黒色処理、赤彩、炭化（煤・タール付着）等についても、適宜トーンで表した。

底部調整については、回転糸切りは d で表した。

- 7 遺物である礫のうち、敲打痕があるものは、「 \triangleleft — \triangleright 」がその範囲を、擦り痕があるものは「 \blacktriangleleft — \blacktriangleright 」でその範囲を示した。

- 8 挿図中の遺物番号は、遺物実測図及び遺物観察表の番号と一致している。

- 9 土層断面のうち一部は、平面図中の遺構を省略している場合がある。

- 10 遺物観察表の凡例は、次のとおりである。

法量の単位は、cmである。また、推定値・現存値は括弧付けで示した。

胎土は、土器に含まれる含有鉱物を以下の記号で示した。

A…白色粒子、B…黒色粒子、C…赤色粒子、D…褐色粒子、E…赤褐色粒子、F…白色針状物質、G…長石、H…石英、I…白雲母、J…黒雲母、K…角閃石、L…片岩、M…砂状、N…礫、O…金雲母

色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 2010年版）に照らし最も近似した色相を示した。

目 次

序 文		III 遺跡の概要	
例 言		1 北廓遺跡について	5
凡 例		2 調査の方法	5
目 次		3 検出された遺構と遺物	8
I 発掘調査の概要	1	IV 遺構と遺物	8
1 調査に至る経過	1	1 住居跡	8
2 発掘調査・報告書作成の経過	1	2 ピット	14
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	2	3 遺構外出土遺物	14
II 遺跡の立地と環境	3	V 調査のまとめ	17

挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形図	2	第7図 第2号住居跡	12
第2図 周辺遺跡分布図	4	第8図 第2号住居跡出土遺物	12
第3図 調査地点位置図	6	第9図 第3号住居跡	13
第4図 調査区全測図（北廓遺跡）	7	第10図 ピット	14
第5図 第1号住居跡	9	第11図 遺構外出土遺物（1）	15
第6図 第1号住居跡出土遺物	10	第12図 遺構外出土遺物（2）	17

挿 表 目 次

第1表 第1号住居跡出土遺物観察表（1）	9	第3表 第2号住居跡出土遺物観察表	13
第2表 第1号住居跡出土遺物観察表（2）	11	第4表 遺構外出土遺物観察表	16

図 版 目 次

図版1 B区全景（第1号住居跡）（南から） 第3号住居跡（南東から） 第1号ピット（南から）		第6図34、37、第6図24、 第6図21、第6図35、 第6図22、第6図36
図版2 A区全景（西から） 第2号住居跡（南から） 発掘作業風景		図版4 第8図1～8、第11図1、 第11図4～10、第11図11～15、 第11図16、第11図17、 第11図19
図版3 第6図1～7、第6図8、9、 第6図10～14、16、17、19 第6図12（内面）、第6図26		第12図27（表）、（裏）

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

平成28年6月24日付けで、福田敏博氏から埼玉県教育委員会あてに、文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出があった。開発の内容は面積1143.36㎡の集合住宅の造成並びに浄化槽の設置であった。

熊谷市教育委員会は届出を受けて、同年7月7日に試掘調査を実施した。その結果、浄化槽設置箇所2か所（合計20㎡）の現地表面下46～52cmの深度から縄文時代から平安時代にかけての土器片、玉斧などの埋蔵文化財の所在が確認された。

その後、埋蔵文化財の所在が確認された旨を福田氏に回答するとともに、その保存に関する協議を重ねたが、工事は保護層が設けられない工法で行うものであり、計画の変更しない方針となったため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

そのため、熊谷市教育委員会では熊谷市大里地区遺跡調査会（以下、調査会）を設立し、発掘調査をその調査会が行うこととなった。

発掘調査は、調査会から、平成28年9月1日付熊大発第2号で、文化財保護法第92条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出が提出され、平成28年9月26日から開始された。

発掘調査終了後、平成29年4月3日から遺物整理および報告書刊行作業を開始した。

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

発掘調査は、平成28年9月26日から平成28年10月7日にかけて行われた。調査面積は、339.29㎡であった。

まず、平成28年9月26日に遺構確認面まで重機による表土剥ぎを行った。表土を剥ぎ終わったのち、翌日から遺構精査作業を行った。調査箇所は2か所の浄化槽部分に分かれるため、それぞれ北側からA区、B区と設定し、それぞれに住居跡が確認され、順次遺構の調査に着手した。

雨の心配もなく、予定した期間内で無事調査を終え、最終的に平成28年10月7日、調査のすべてを終了した。

(2) 整理・報告書作成作業

整理作業は、平成29年4月3日から始めた。まずは、遺物の洗浄・注記・復元を行い、その後11月までに順次、遺物の実測、拓本取りを行った。12月からは遺構の図面整理作業を行い、遺構・遺物図面のトレース、遺構・遺物の図版組を行い、2月下旬には、原稿執筆、割付等の作業をして、報告書の印刷に入り、校正を行った後、平成30年3月26日に本報告書を刊行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 熊谷市大里地区遺跡調査会

主体者 熊谷市教育委員会

(1) 発掘調査

平成28年度

会 長
副 会 長
事務局長
事務局次長
統括調査員
調 査 員
調 査 員
調 査 員
調 査 員
調 査 員
嘱 託 職 員

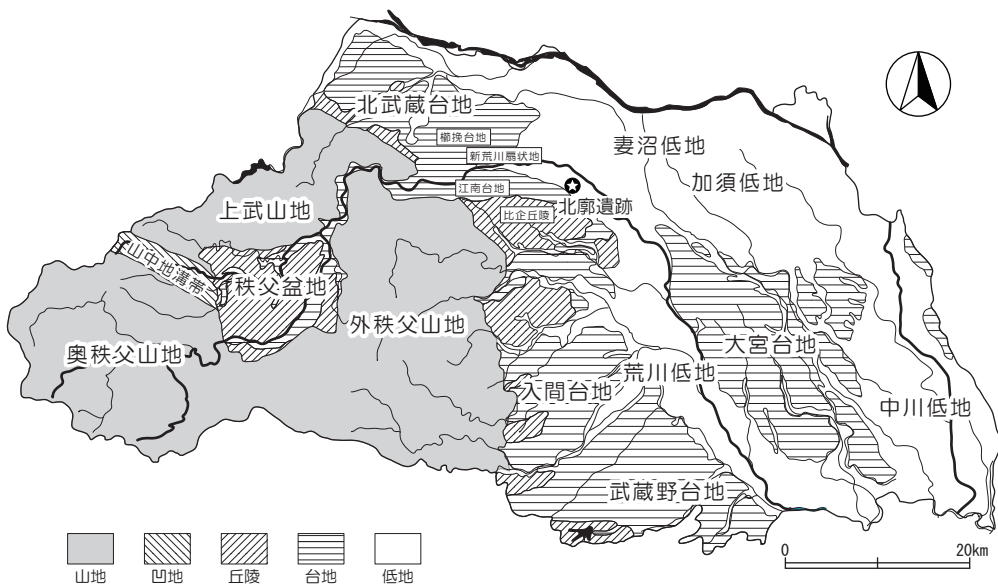
野原 晃
米澤 ひろみ
山崎 実
森田 安彦
吉野 健
松田 哲
小島 洋一
蔵持 俊輔
腰塚 博隆
山下 祐樹
山崎 和子

(2) 整理・報告書作成

平成29年度

教 育 長
教 育 次 長
社会教育課長
社会教育課担当副参事
社会教育課副課長兼文化財保護係長
主 査
主 査
主 査
主 査
主 任
主 任
主 事
主 事
主 事
嘱 託 職 員

野原 晃
正田 知久
鶴田 敏男
吉野 健
新井 端
松田 哲
星 祥子
小島 洋一
蔵持 俊輔
山下 祐樹
腰塚 博隆
武部 喜充
島村 範久
大野 美知子
山崎 和子



第1図 埼玉県の地形図（北廓遺跡 位置図）

Ⅱ 遺跡の立地と環境

北廓遺跡は、熊谷市に所在し、JR 高崎線熊谷駅の南西約 9 km、荒川から南へ約 4 km に位置する。熊谷市は西側に櫛挽台地、荒川を挟んで南側には江南台地及び比企丘陵、北側、東側には妻沼低地が広がり、本市の大半はこの妻沼低地上に位置している。

本遺跡が位置する大里地域は平成 17 年に合併する以前は大里町であり、この地域は荒川上流右岸に位置し、地形的には低位の扇状地と比企丘陵を有している。

遺跡はこの比企丘陵先端の箕輪台地上に位置する。標高 30 m 前後が最大であるこの箕輪台地は比企丘陵でも一段低い台地となっており、台地の形状は中央部が平坦で周囲にある水田に向かって緩やかに傾斜している。北側には水田と和田吉野川が流れ、南側は丘陵からの多数の開析谷が入り組んでいる。

この箕輪台地での遺跡の分布状況は、ほぼ全面において確認されている。今回は、この箕輪台地周辺における歴史環境を紹介させていただく。

箕輪台地での縄文時代は、前期が北廓遺跡、中廓遺跡などで黒浜式の土器を有する土坑が検出されている。中期では、遺物は見られるものの遺構等は確認されていない。後期から晩期にかけては台地東側の中廓遺跡で安行 1～3a の土器群が表採されている。

周辺の遺跡状況を見てみると前期の黒浜式、諸磯式土器の出土遺跡が、比企丘陵北東部では青山遺跡で諸磯 a 式の住居跡 1 軒が検出され、桜谷北遺跡では同時期の土壌を検出している。南比企地方では、緑山遺跡から黒浜、諸磯 a 式の住居跡 3 軒、土坑 6 基を検出し、桜山古墳群、立野遺跡等では諸磯 a 又は b 式土器を出土している。一方、荒川右岸の江南台地から扇状地扇頂のある寄居方面に目を向けてみると、代表的なもので深谷市の船山遺跡（梅沢 1972）においてまとまった諸磯 a・b 式土器が出土しており、さらに寄居町の河岸段丘面には甘粕原遺跡、ゴシン遺跡が所在する。荒川左岸においてはいくつかの遺跡があるが、荒川右岸と左岸での縄文時代前期の遺跡の集中密度には違いが見られる。

弥生時代に入ると箕輪台地の北廓遺跡を中心に集落を営んでいたと思われる、他の地点ではこれまで遺構、遺物は確認されていない。この北廓遺跡内に所在する吉見小学校の校庭には方形周溝墓や住居跡と思われるプランをみることができる。

比企丘陵では、弥生後期の土器である櫛状工具による文様主体とする岩鼻式土器と、縄文を主体とする吉ヶ谷式土器の二系統の土器群が存在する。過去の調査で北廓遺跡から住居跡や方形周溝墓から両者の出土が確認されている。また、一部甕片からはどちらの土器の特徴を備えたものが確認されており、岩鼻式から吉ヶ谷式へと変化を示すものと考えられる。

古墳時代に入ると県選定重要遺跡のとうかん山古墳が現存するが、周囲の遺物分布からかなりの埴輪片を拾うことができることから他にも古墳が存在したと思われる。集落跡では中廓遺跡、番場遺跡、東松山市域の玉太岡遺跡、岡遺跡等に中期から後期の住居跡、土坑等が検出されている。

奈良・平安時代に入ると台地南側の比企丘陵寄りに賢木岡遺跡があり、地形に沿ってほぼ 9 世紀後半の集落跡がある。

中世に入ると地名から想定できるように館跡の所在であるが、前回の調査で水溜井戸及び柱穴群を検出し、同調査箇所南へ約 100 m の所に土塁が所在することなどから、小学校を中心に館跡が所在した



第2図 周辺遺跡分布図

とみられる。しかし、時期や館主については不明な点も多い。

以上が箕輪台地の遺跡分布状況である。縄文～弥生時代にかけては台地東側に偏るが、古墳時代に入ると集落が台地全体に広がり、奈良・平安になると丘陵寄りに偏る状況がみられる。中世では台地北側に館を構えるようになる。

なお、中世以降の歴史的事態はまだまだ情報不足で、今後の調査成果によるところが多く、情報の蓄積に期待するところであろう。

Ⅲ 遺跡の概要

1 北廓遺跡について

北廓遺跡は、これまでに旧大里村教育委員会が昭和 61 年に発掘調査を実施し、住居跡 1 軒（弥生時代）、方形周溝墓 1 基（弥生時代）、土坑 13 基、柱穴 8 基（縄文、弥生時代）、井戸跡 1 基、竪穴状遺構 1 基が確認されている。時期判断ができない遺構が多いが縄文時代から弥生時代にかけての遺構が多数であったものと推察される。

発掘調査以外の試掘や土器採集などから、本遺跡は縄文時代前期から人々の痕跡が確認でき、中期は遺物のみで、後期、晩期では遺構、遺物とも検出されていない。

弥生時代では集落の存在が確認でき、遺跡周辺の特吉見小学校校庭内からは方形周溝墓や住居跡が検出されている。

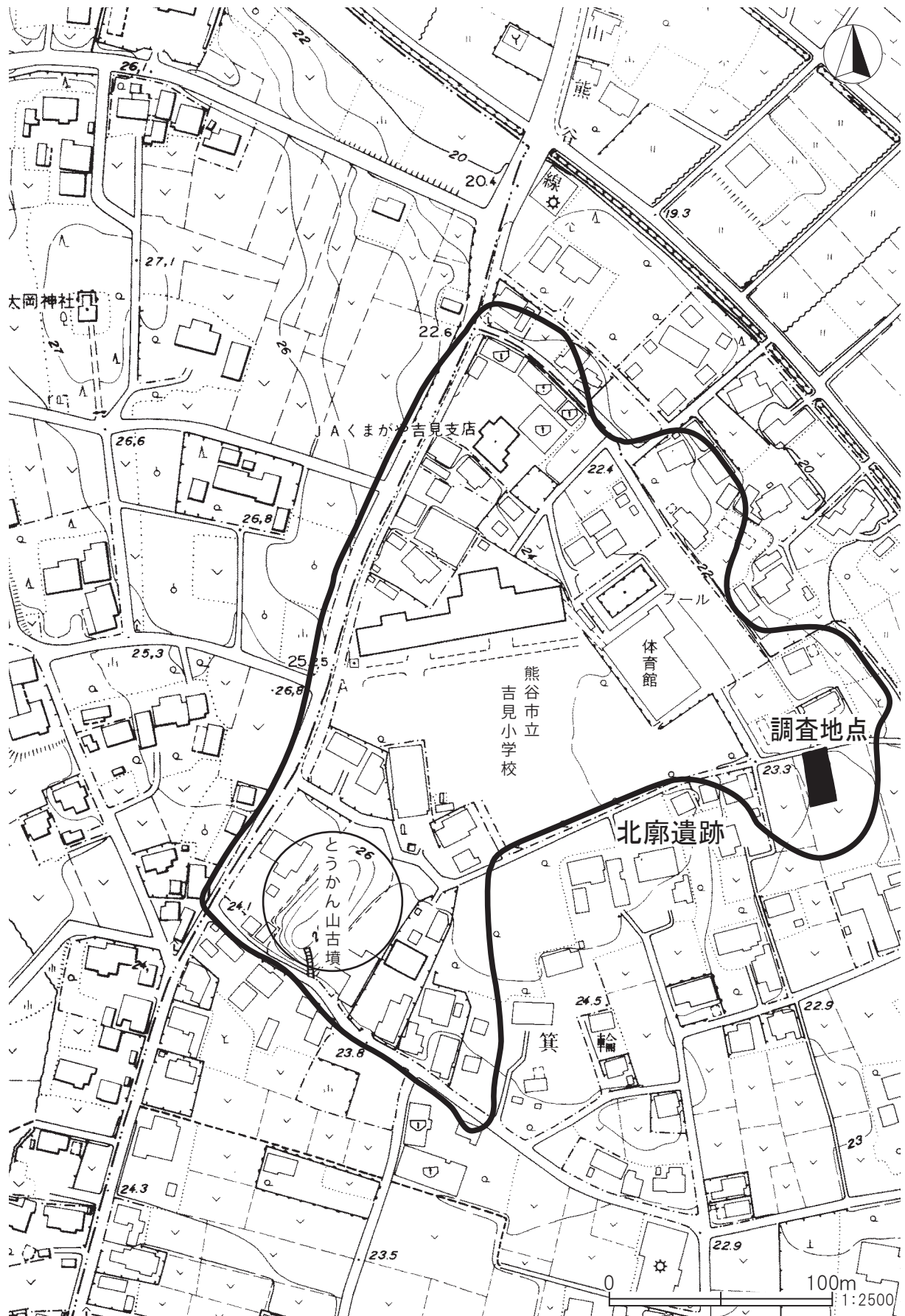
古墳時代ではとうかん山古墳が現存することから、周囲に古墳が存在していた可能性がある。

奈良・平安時代以降は集落跡と考えられる遺構は確認できず、隣接する賢木岡東遺跡や中廓遺跡の一部で確認されるのみである。

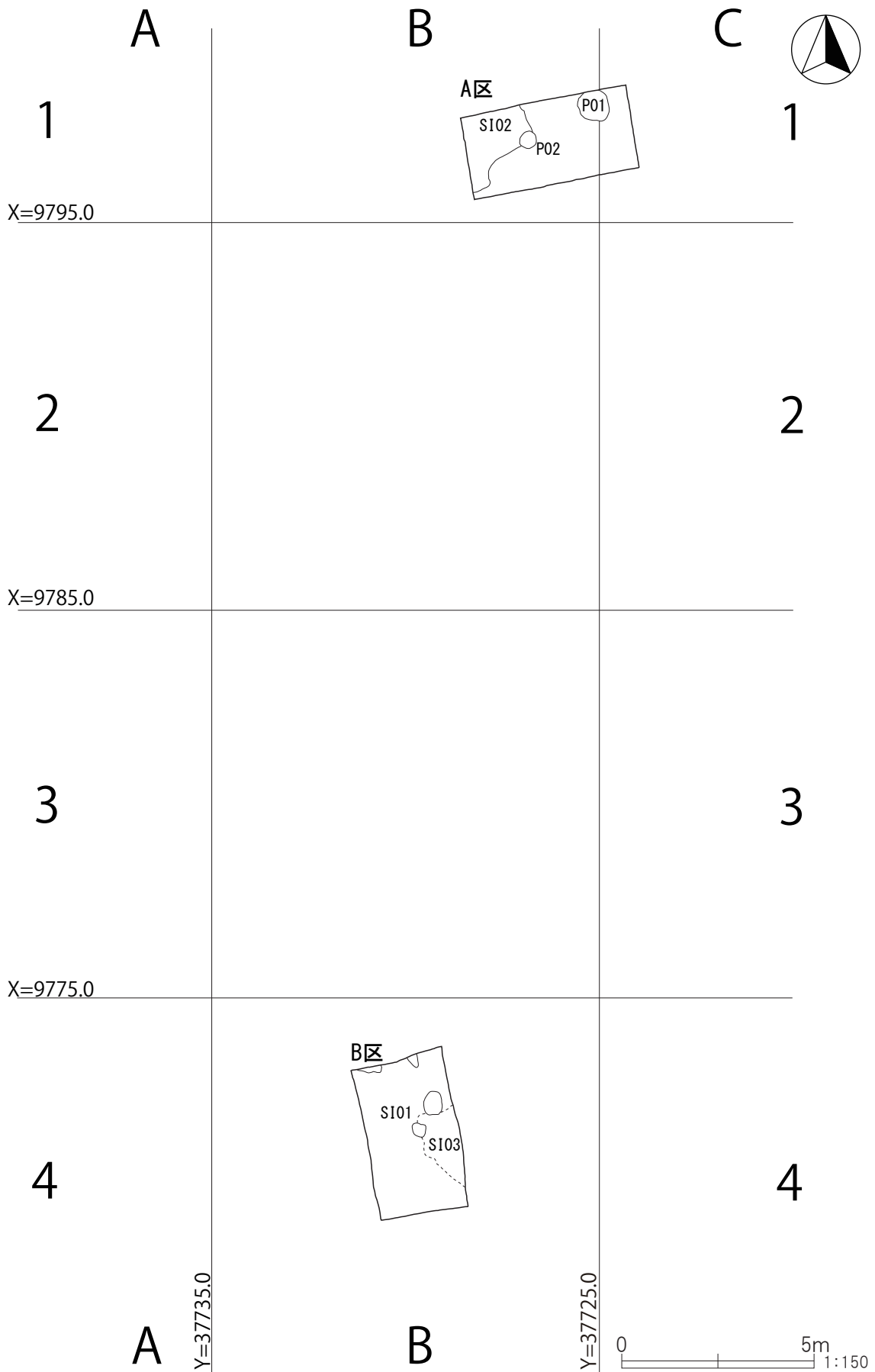
2 調査の方法

発掘調査の方法は、1 辺 5 m のグリッド方式を用いて行い、調査区全体を網羅できる様に、北西隅を A-1 とし東へ A・B・C・・・、南へ 1・2・3・・・とし、A ラインは北から南へ A-1・A-2・A-3・・・と呼称した。B ライン以西も A ラインと同様に呼称し、グリッド設定を行った。

発掘調査は、重機による遺構確認面までの表土剥ぎを行った後、先述のグリッド設定を行った。測量は世界測地系による国家方眼座標に基づく基準点測量による。重機による表土剥ぎを実施し、その後は、人力による遺構確認のための精査を実施し、確認された各遺構は各々手掘りを行った。原則として遺物は必要に応じて写真撮影後、遺構ごと一括して慎重に取り上げた。遺構は写真撮影した後、実測を行った。そして、最後に遺構全体の写真撮影を行い、全測図の実測を行った。



第3図 調査地点位置図



第4図 調査区全測図（北廓遺跡）

3 検出された遺構と遺物

本調査によって検出された遺構は、A、B区合計して、竪穴住居跡3軒、ピット2基であった。調査区のうちA区では竪穴住居跡1軒、ピット2基、B区では竪穴住居跡2軒であった。

遺物については、縄文土器から平安時代における土師器までの遺物が検出された。また、事前の試掘調査で玉製の玉斧が検出されている。検出した遺物量はコンテナ（大きさ：縦40cm、横60cm、深さ14cm）に1箱であった。

IV 遺構と遺物

1 住居跡

本調査における住居跡の検出状況はA、B区合わせて3軒が確認された。A区で西側から1軒、B区からはその調査区すべてが1軒分で、その下にもう一軒分の住居跡が検出された。

以下、住居跡ごとに詳細を記載する。

第1号住居跡（第5図）

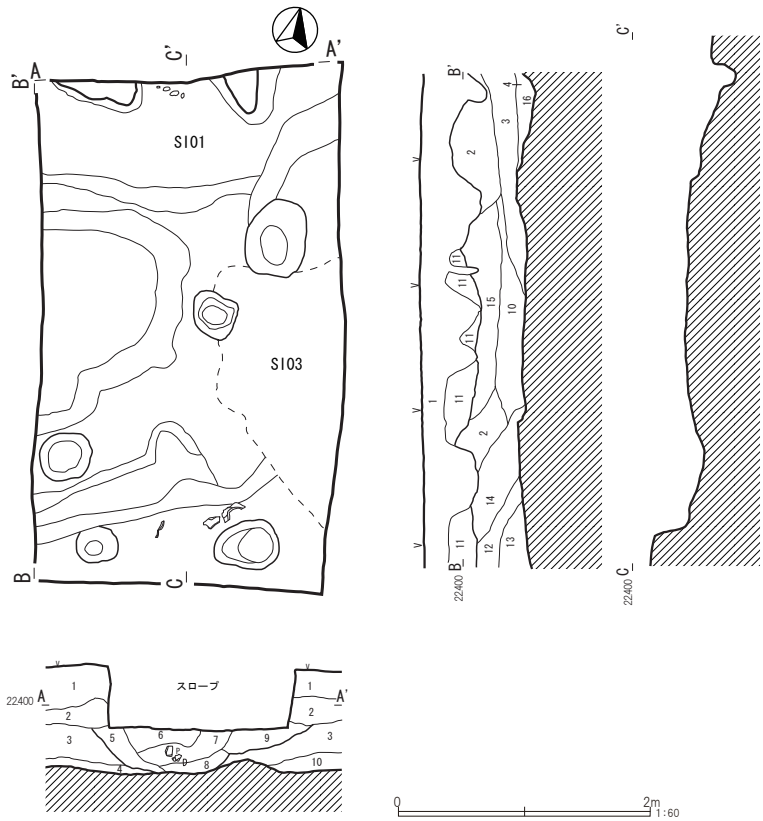
B-4グリッドから検出した。第3号住居跡と重複しており、この第3号住居跡を切っていた。このB区すべてがこの第1号住居跡であるが、残念ながら住居すべてが検出されたわけではなく、全体の60パーセント程度の検出にとどまっており、正確な様相は不明である。

正確な規模は不明であるが、検出長軸がおよそ3.95m、検出短軸は2.41mを測り、カマドのそでが確認できるため主軸方向はN-12°-Wでほぼ北西方向を指すことが分かる。現地表面下から0.83m、確認面からの深さは、平均して0.35mであることが確認された。床面は一様に平坦ではなく、柱穴と推定できるピット状のくぼみや、起伏が目立ち、そこへ灰褐色のしまりの強い粘質土を入れ込んだ形跡があった。床面を平坦にするための対策と推察できる。床面にはピット状の落ち込みが5基、土坑状の落ち込みが1基ある。カマド周辺はやや落ち込みが確認できる。住居跡の西中央では明らかな大きな土坑状のくぼみが確認できた。南壁付近でもやや南に向かって傾斜が確認できたが、残存状態が悪く、それらの性格について判断できなかった。

土層観察からカマドの覆土は第5～9層であり、灰黄色粘質土を含み、粘土で作ったカマドが崩落したものと考えられる。焼土を多く含むことから、カマドの利用があったことも分かる。しかし、残念ながら住居跡本体の残存状態は悪く、覆土は上層を後世の耕作などで消滅しており、いささか堆積状況が不自然であるが、自然堆積による埋没と推測できる。

出土遺物は縄文土器、土師器坏、甕、須恵器坏、甕等であった。これらのうちの大半が土師器や須恵器であること、カマドの検出があることから、縄文土器は流れ込みか、第3号住居跡の遺物と考えられる。カマド付近と南壁の傾斜箇所でも複数のまとまった遺物散乱箇所を確認することができた。

時期に関しては、大体8世紀中ごろから8世紀末と推測される。

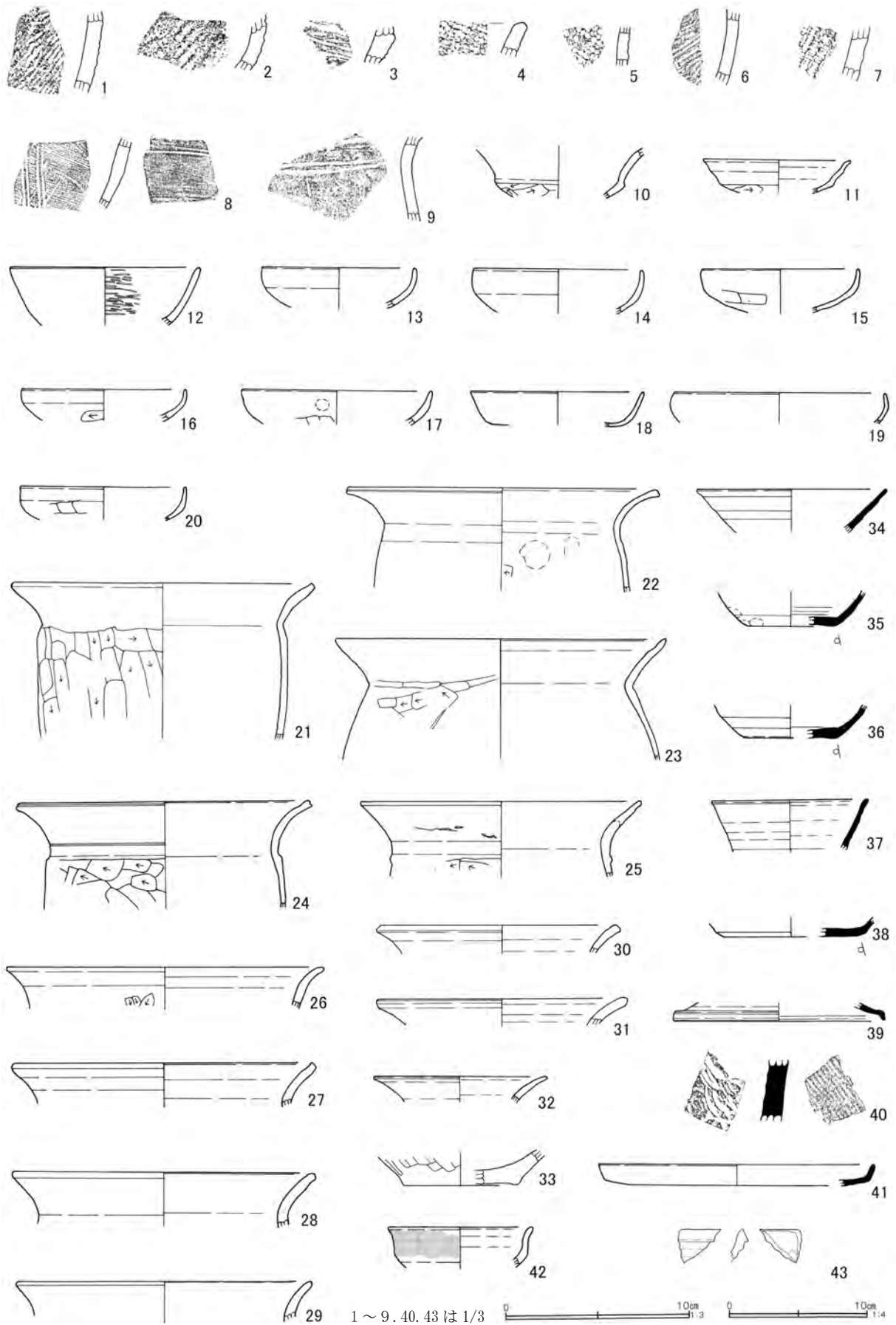


- 第1号住居跡 (A-A') (B-B')
1. 暗灰黄 2.5Y-5/2 (旧耕作土)
 2. 黒褐 10YR-3/2 (しまり弱、灰利-フ' 粒子、フ' ロック多量、土器片、ソフトローム土含)
 3. 利-フ' 黒 5Y-3/1 (少々粘質、しまり強、ソフトローム土ブロック少量)
 4. 黄灰 2.5Y-4/1 (粘質、しまり弱、ソフトローム土粒子・ブロック多量)
 5. 灰褐 7.5YR-4/2 (少々しまり強、焼土、ソフトローム土、灰黄色粘質土ブロック含、土器片、炭化物)
 6. 黄褐 2.5Y-5/3 (少々しまり強、灰黄色粘質土ブロック含)
 7. 灰利-フ' 5Y-4/2 (少々しまり強、土器片、焼土、灰黄色粘質土ブロック含、ソフトローム土粒子・ブロック含)
 8. 利-フ' 黒 5Y-3/1 (やや粘質、少々しまり強、灰黄色粘質土ブロック含、焼土、炭化物有)
 9. 黒褐 2.5Y-3/1 (灰黄色粘質土ブロック、ソフトローム土ブロック含)
 10. 灰 5Y-4/1 (しまり弱、ソフトローム土ブロック、灰黄色粘質土ブロック、炭化物)
 11. 黒褐 2.5Y-3/1 (しまり弱、1の粒子わずかに含)
 12. 利-フ' 黒 5Y-3/1 (しまり弱、ソフトローム土ブロック有)
 13. 利-フ' 黒 5Y-3/2 (やや粘質、少々しまり有、土器片)
 14. 利-フ' 黒 7.5Y-3/1 (ソフトローム土ブロック・粒子含、灰利-フ' 粒子・ブロック有)
 15. 暗灰黄 2.5Y-4/2 (しまり弱、ソフトローム土粒子・ブロック、土器片有)
 16. 暗灰黄 2.5Y-4/2 (砂質、しまり弱、炭化物少々、ソフトローム土粒子、灰利-フ' 粒子・ブロック有)

第5図 第1号住居跡

第1表 第1号住居跡出土遺物観察表(1)

N o	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	縄文土器 器種不明	-	-	-	ABHIMNO	褐 7.5YR-4/3	B	破片	外面：LR 単節縄文有 (摩耗著しい)	諸磯式
2	縄文土器 器種不明	-	-	-	AEGHJM	橙 5YR-7/6	B	破片	外面：LR 単節縄文有 (摩耗著しい)	諸磯式
3	縄文土器 器種不明	-	-	-	ABEHMNO	赤灰 2.5YR-4/1	B	破片	外面：櫛描による平行沈線文3条、間に縄文痕か?	諸磯式
4	縄文土器 甕 or 壺	-	-	-	ABIN	にぶい橙 7.5YR-6/3	B	口縁部破片	外面：RL 単節縄文痕有 内面：横ナデ調整痕有	諸磯式
5	縄文土器	-	-	-	ABGI	赤灰 2.5YR-4/2	B	破片	外面：縄文痕か?	諸磯式
6	縄文土器	-	-	-	ABI	にぶい黄橙 10YR-6/4	A	破片	外面：(斜位) ハケ目痕有	諸磯式
7	縄文土器	-	-	-	ABHI	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	破片	外面：LR 単節縄文	関山式
8	土師器 器種不明	-	-	-	ABEHI	にぶい橙 7.5YR-7/3	A	破片	外面：ハケ目痕 (斜位)、2本1単位の櫛描による沈線文2節有 (縦位)、4条の櫛描による沈線文有 (斜位) 内面：外面と同一工具によるハケ目痕及び2条1単位の櫛描沈線有、ミガキ調整有	
9	土師器 甕	-	-	-	ABDEGO	灰褐 5YR-4/2	B	口縁部～肩部破片	外面：口縁部接着痕有、口縁～肩部にかけヘラケズリ痕 (縦位)	
10	土師器 坏	-	(3.8)	-	ABCGM	明赤褐 2.5YR-5/8	B	体部 15%	蓋模倣杯 底部周辺ヘラケズリ痕有	
11	土師器 坏	(10.8)	(2.4)	-	ABGM	にぶい黄褐 10YR-7/2	B	口縁部～体部 15%	有段口縁坏 底部周辺ヘラケズリ	
12	土師器 坏	(13.8)	(4.2)	-	ABD	外面：にぶい橙 7.5YR-7/4 内面：黒 10YR-1.7/1	B	口縁部～体部 10%	内面：黒色処理 (横位暗文有)	
13	土師器 坏	(11.3)	(3.0)	-	ABCIJ	明褐 7.5YR-5/6	B	口縁部～体部 20%	口縁部わずかに直立する	
14	土師器 坏	(12.4)	(3.2)	-	ABCJK	にぶい黄褐 10YR-4/3	B	口縁部～体部 20%	やや口縁部内湾する	
15	土師器 坏	(11.4)	(3.2)	-	ABCI	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	口縁部～体部 30%	外面：底部付近ヘラケズリ痕	
16	土師器 坏	(12.0)	(2.3)	-	ABCIJ	にぶい褐 7.5YR-5/4	B	口縁部～体部 20%	口縁部わずかに内湾する	
17	土師器 坏	(13.3)	(2.5)	-	AB	橙 7.5YR-6/6	B	口縁部～体部 20%	外面：指頭圧痕有、体部周辺ヘラケズリ痕有	



第6図 第1号住居跡出土遺物

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表(2)

N o	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
18	土師器 坏	(12.1)	(2.5)	-	ABCI	橙 7.5YR-6/6	B	口縁部～体部 20%		
19	土師器 坏	(15.5)	(2.2)	-	ABC	褐 10YR-4/4	B	口縁部～体部 10%	口縁部やや内湾する	
20	土師器 坏	(12.1)	(2.4)	-	ABCIJ	橙 7.5YR-6/6	B	口縁部～体部 20%	口縁部直立 底部付近ヨコナデ痕有	
21	土師器 甕	(21.9)	(11.3)	-	ABDEMNO	にぶい橙 7.5YR-7/3	B	口縁部～胴部 30%	外面：胴部ヘラケズリ痕(上段：横位)(下段：縦位)	
22	土師器 甕	(22.3)	(7.7)	-	ABDEINO	にぶい橙 7.5YR-7/3	B	口縁部～胴部 20%	外面：口唇部沈線有(1条)、胴部ヘラケズリ(縦位か?) 内面：指頭圧痕有	
23	土師器 甕	(23.8)	(7.5)	-	ABDEGIO	橙 5YR-6/6	B	口縁部～胴部 20%	外面：口縁部～胴部接続痕有、胴部ヘラケズリ痕(斜位)	
24	土師器 甕	(21.5)	(7.8)	-	ABDEHIMN	淡黄 2.5Y-8/3	B	口縁部～胴部 30%	内外面：口縁部ヨコナデ調整痕 胴部外面ヘラケズリ痕	
25	土師器 甕	(20.4)	(6.5)	-	ABEHKM	明赤褐 5YR-5/6	B	口縁部～胴部 10%	外面：口縁部輪積痕有、胴部ヘラケズリ痕(横位)	
26	土師器 甕	(22.8)	(3.1)	-	ABDEI	暗赤灰 7.5R-3/1	B	口縁部 10%	外面：ヨコナデ痕、わずかに下段部ヘラケズリ痕有(縦位)	
27	土師器 甕	(22.9)	(3.3)	-	ABDE	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	口縁部 10%	外面：わずかにヨコナデ痕有	
28	土師器 甕	(20.0)	3.8	-	ABDEIM	褐灰 5YR-5/1	B	口縁部 10%	内外面：口縁部ヘラナデ調整痕有 やや厚み有	
29	土師器 甕	(21.5)	(2.5)	-	ABEO	褐灰 5YR-4/1	B	口縁部 10%		
30	土師器 甕	(17.8)	(2.3)	-	ABDEHIK	にぶい橙 5YR-7/4	B	口縁部 10%		
31	土師器 甕	18.2	(2.0)	-	ADEI	灰褐 7.5YR-4/2	A	口縁部 20%		
32	土師器 甕	12.6	(1.9)	-	ABEHJMO	橙 2.5YR-6/8	B	口縁部 10%		
33	土師器 甕	-	-	(8.4)	ABDEK	橙 2.5YR-6/8	B	胴部～底部 20%	外面：胴部ヘラケズリ痕(縦位)	
34	須恵器 坏	(13.8)	(3.1)	-	ABF	灰 5Y-5/1	B	口縁部～体部 30%	回転ナデ痕有	南比企産
35	須恵器 坏	-	(2.7)	(6.0)	ABF	灰 5Y-4/1	B	体部～底部 45%	外面：指オサ工痕有 内外面：火襷痕有	南比企産
36	須恵器 坏	-	(2.5)	(6.8)	ABFI	灰オリーブ 5Y-6/2	B	底部～体部 40%	回転ナデ痕有	南比企産
37	須恵器 碗	(11.5)	(3.5)	-	ABDFN	灰 5Y-6/1	B	口縁部～体部 10%		南比企産
38	須恵器 坏	-	(1.4)	(9.9)	ABCFI	灰 5Y-6/1	B	底部 20%	回転ナデ痕有	南比企産
39	須恵器 蓋	(15.5)	1.3	-	AFM	灰 7.5Y-5/1	B	口縁部 10%		南比企産
40	須恵器 甕	-	-	-	AEN	灰 10Y-5/1	A	破片		
41	須恵器 盤?	(20.0)	(1.6)	(15.2)	ABF	灰 5Y-5/1	B	口縁部～底部 10%		南比企産
42	陶器 碗	(10.6)	3.0	-	AD	外面：赤黒 2.5YR-1.7/1 内面：灰白 7.5Y-7/1	B	口縁部～体部 10%	外面：鉄軸付けがけか?	
43	陶器	-	-	-	ABE	外面：灰白 N-7/ 内面：明赤褐 7.5R-3/3	B	破片	内面：釉薬有(種別不明)	

第2号住居跡(第7図)

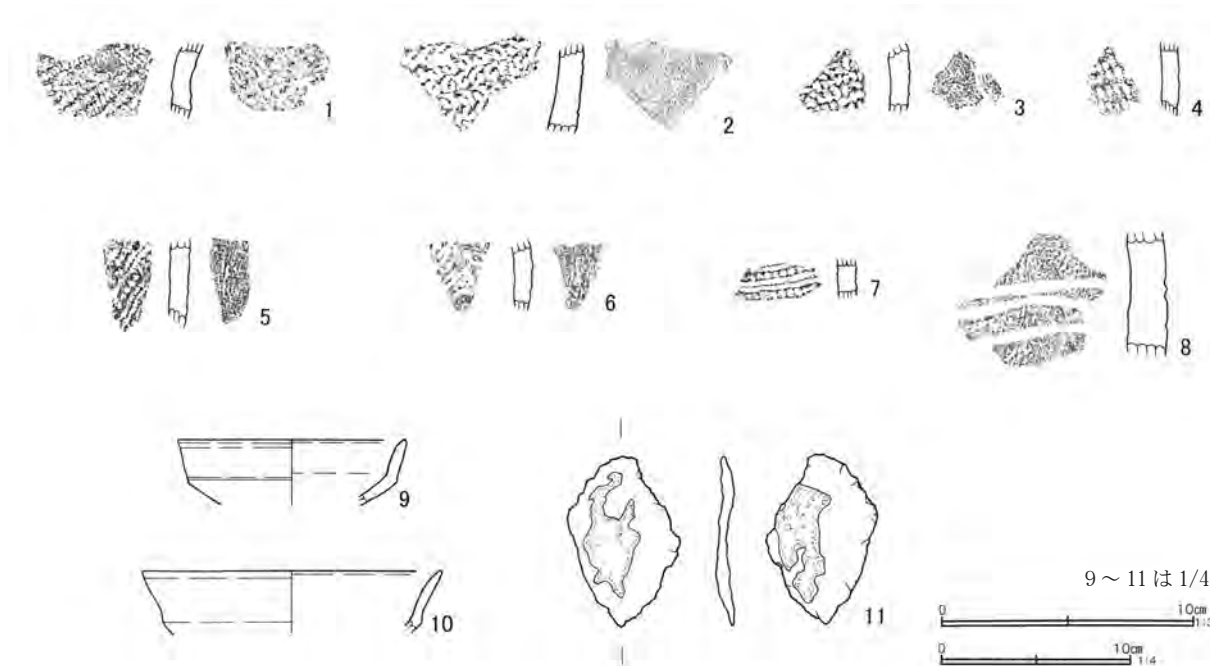
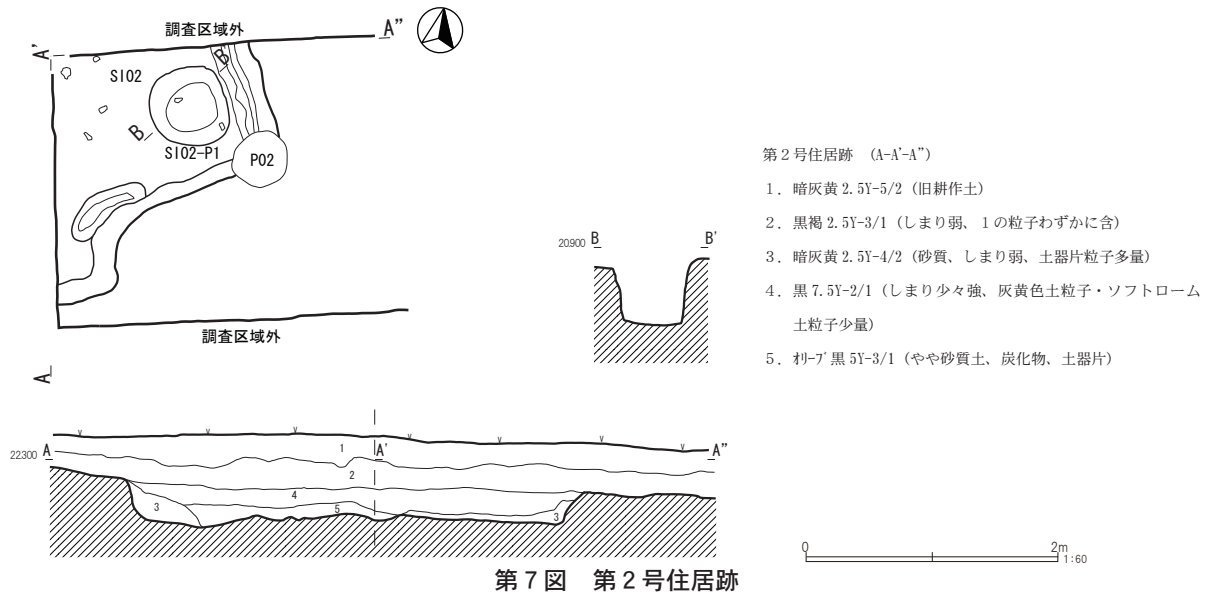
B-1グリッドから検出した。住居跡はA区の西側に検出され第2号ピットと重複している。第2号ピットがこの住居跡を掘り込んでいた。住居の半分以上は調査区域外であるため詳細は不明である。

正確な規模は不明であるが、形状がややいびつで、検出長軸がおよそ1.95m、検出短軸は1.08mを測り、第1号住居跡同様、北西方向を向くものと考えられる。現地表面下からの深さは、0.68mを測り、確認面からの深さは、平均して0.25mであることが確認された。床面の状態はわずかな起伏が目立ち、特に東側には幅0.18mの壁溝と直径0.60mの落ち込みが確認できる。

住居跡としての残存状態は悪く、断面観察から、覆土は基本層で4層（第3～5層）であることが分かる。周辺からのレンズ状堆積で埋まったことが分かり、自然堆積であることが推定される。

出土遺物は先述した第1号住居跡と比較し、わずかな検出であった。出土遺物は縄文土器深鉢？、土師器坏などが検出された。いずれも一個体分の検出ではなく、胴部、頸部、口縁部片などであり、縄文土器は外面を縄文や篋状工具、櫛状工具による文様が描かれている。

時期に関しては、縄文土器は早期～中期ごろ、土師器は7世紀後半に位置づけられるものと推測される。しかしながら、この住居跡の平面プランでの判断や遺物の出土量からの推察が難しいことから、時期判断は保留とした。



第3表 第2号住居跡出土遺物観察表

N o	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考	
1	縄文土器	-	-	-	AB	褐 7.5YR-4/4	B	破片	内面：条痕文 外面：LR 単節縄文痕有 擦糸文系土器か		
2	縄文土器 深鉢?	-	-	-	ADI	外面：明赤褐 5YR-5/6 内面：灰黄褐 10YR-4/2	B	破片	内面：条痕文、ミガキ顕著 外面：やや太い縄による LR 単節? 縄文痕（羽状）、胎土に繊維含	関山式?	
3	縄文土器	-	-	-	AI	外面：黄灰 2.5Y-4/ 内面：にぶい黄褐 10YR-5/3	B	破片	内面：条痕文 外面：LR 単節縄文痕有		
4	縄文土器	-	-	-	ABD	外面：灰褐 7.5YR-4/2 内面：明赤褐 5YR-5/6	B	破片	外面：LR 単節縄文痕有		
5	縄文土器	-	-	-	AI	にぶい黄褐 10YR-5/4	B	破片	内面：条痕文 外面：LR 単節縄文痕有		
6	縄文土器	-	-	-	ABD	にぶい黄褐 10YR-4/3	B	破片	内面：条痕文 外面：わずかに LR 単節縄文痕有		
7	縄文土器	-	-	-	A	にぶい褐 7.5YR-5/4	B	破片	ヘラ描による沈線文間に刺突文を施す		
8	縄文土器	-	-	-	ABDI	明黄褐 10YR-6/6	B	破片	外面：ヘラ描による沈線文3条 連弧文土器		
9	土師器 坏	(12.1)	(3.5)	-	ABE1	橙 5YR-6/6	B	口縁部～体部 20%	横做杯 外面：ヨコナデ～ヘラケズリ痕		
10	土師器 坏	(15.9)	(3.3)	-	ABE1	橙 7.5YR-6/6	B	口縁部 20%	横做杯 やや口縁縁径大ぶり		
11	スクレーパー	最大長 9.0 cm、最大幅 6.0 cm、最大厚 0.7 cm、重量 40.0 g									凝灰岩

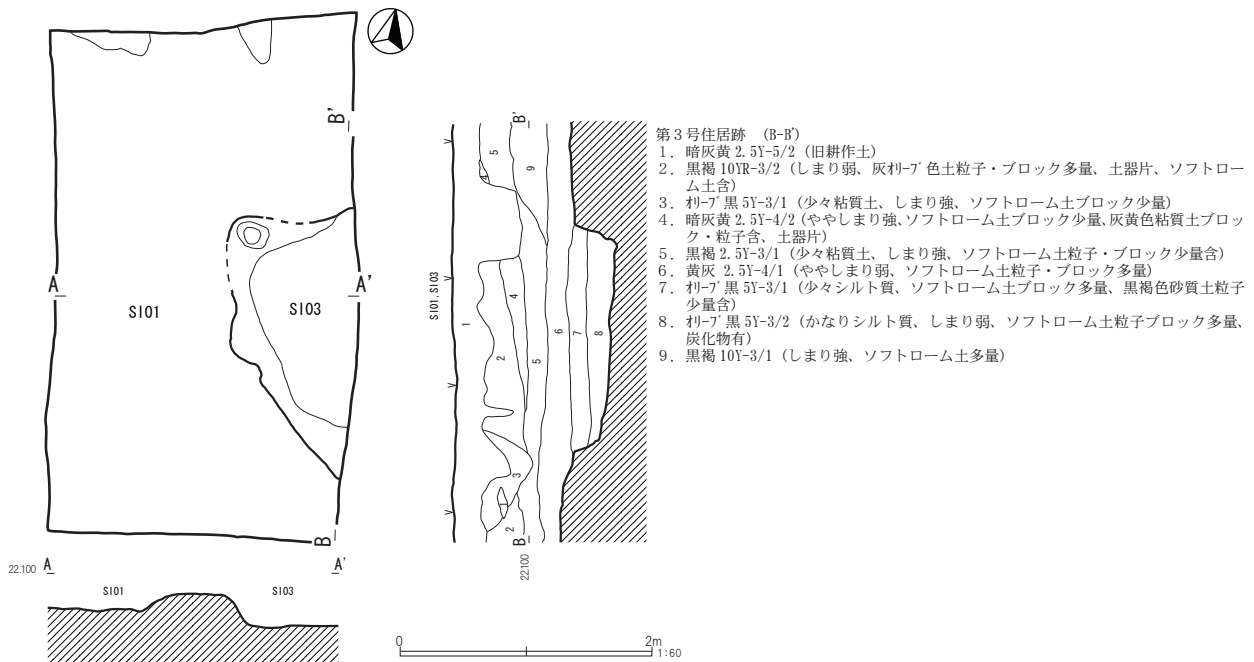
第3号住居跡（第9図）

B-4グリッドから検出した。先述した第1号住居跡と重複しており、A調査区東壁付近では第3号
 竪穴住居跡の一部が検出されている。この第3号竪穴住居跡が第1号竪穴住居跡に切られていた。しか
 しながら、住居の一部は調査区域外に位置すると推定されるため、詳細は不明である。

正確な規模は不明であるが、検出長軸がおおよそ 2.05 m、検出短軸は 1.11 mを測り、北西方向を向く
 ものと考えられる。現地表面下から 0.25 m、確認面からの深さは平均して 0.75 mであることが確認さ
 れた。床面は比較的平坦であり、ピット状の落ち込みが北西隅に1基確認できる。

住居跡としては第1号住居跡に上面を切られていることから残存状態は悪く、覆土は基本層で2層(第
 7、8層)しかない。水平堆積であることから自然堆積で埋まったと推定される。

出土遺物は残念ながら微細な土器片のみで、時期を判別できるものは確認できなかった。



第9図 第3号住居跡

2 ピット

ピットは、総じて2基検出し、そのすべてがA区調査区から検出された。いずれのピットも柱穴となるようなものではなく、単独での性格を持つものと考えられる。

以下、ピットごとに詳細を記載する。

第1号ピット (第10図)

B、C-1グリッドから検出した。他の遺構との重複関係はない。ほぼ完形の検出だが、一部が調査区域外に位置する。

平面プランについては、やや東西に長いいびつな楕円形を呈するものである。

規模は長軸が0.87m、短軸が0.82mを測る、深さは0.25mでありやや西に掘り込みが深い。西側と東側で掘り込みに違いがあり西側はやや急な角度で落ち込んでいる。

土層断面からレンズ状の自然堆積によるものであるが、残念ながらその用途は不明である。

出土遺物は残念ながら検出されなかった。

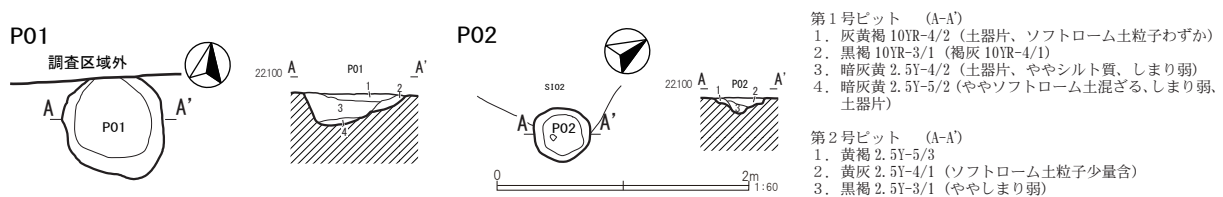
第2号ピット (第10図)

B-1グリッドから検出した。第2号住居跡と重複関係にあり第2号住居跡の一部を掘り込んでいた。

平面プランについては、円形を呈するものである。

規模は0.42～0.44mを測り、ほぼ長軸、短軸ともにほぼ同一であり、深さは0.15mである。掘り込みは中央部分が一番深く落ち込み全体的に均一な掘り方である。残念ながらその用途は不明であり、断面観察からは西からの自然堆積により埋まったことが確認できる。

出土遺物は残念ながら検出されなかった。

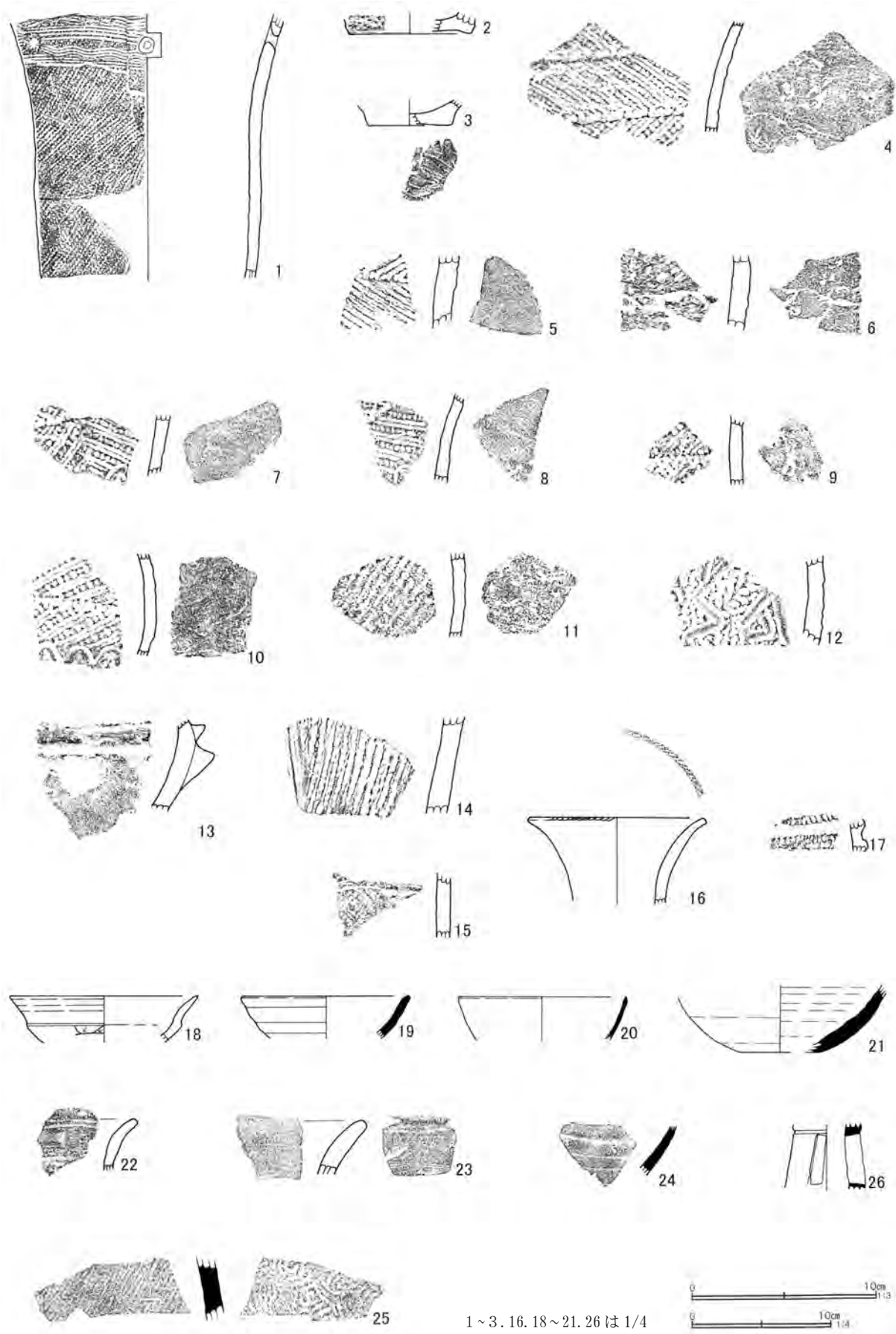


第10図 ピット

4 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物については、主に試掘調査と表土剥ぎの遺物である。何点か出土したが、その内の大部分はB区付近からであった。第1号、3号住居跡に起因する遺物と推測される。

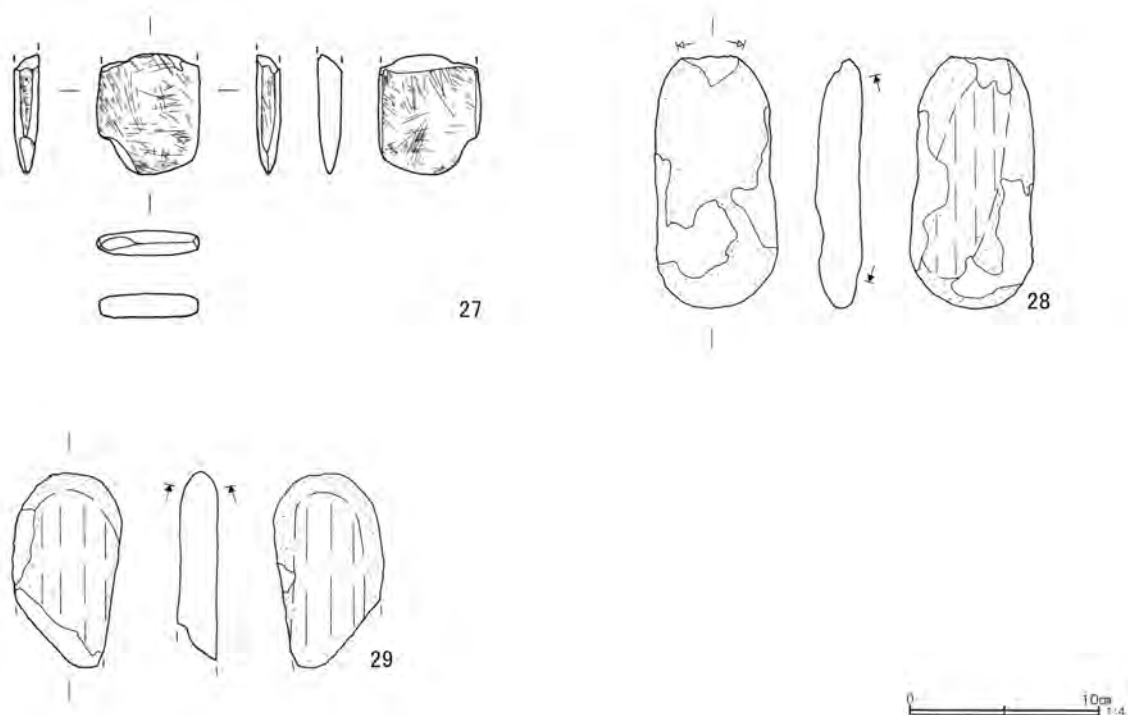
以下、遺構外出土遺物として掲載する。



第11図 遺構外出土遺物(1)

第4表 遺構外出土遺物観察表

No	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考	
1	縄文土器 深鉢	-	(19.3)	-	ABEHIJ	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	胴部 30%	外面：櫛描による波状文（5条1単位）が2節、その間に平行沈線文（3条1単位）、1箇所穿孔有、胴部LR単節縄文痕有		
2	縄文土器	-	(1.6)	-	ABDI	にぶい褐 7.5YR-5/4	B	底部 10%			
3	縄文土器	-	(1.9)	(2.9)	ABEI	黒褐 7.5YR-3/1	B	底部 30%			
4	縄文土器	-	-	-	DH	黒褐 2.5Y-3/2	B	破片	外面：LR単節及びRL単節を交互に3列有 内面：条痕文	黒浜式	
5	縄文土器	-	-	-	ABDEIK	外面：にぶい橙 7.5YR-6/4 内面：黒褐 10YR-3/1	B	破片	外面：捺糸文系土器 内面：条痕文有	黒浜式	
6	縄文土器	-	-	-	ABDIJ	にぶい褐 7.5YR-5/4	B	破片	内面：条痕文有	黒浜式	
7	縄文土器	-	-	-	D	にぶい赤褐 5YR-4/4	B	破片	2本の小さな縄と大きめの縄1本による施文羽状縄文系	黒浜式	
8	縄文土器	-	-	-	D	明赤褐 5YR-5/6	B	破片	小さな縄目（2本）と大きめの縄目（1本）の組み合わせ 羽状縄文系	黒浜式	
9	縄文土器	-	-	-	D	外面：にぶい褐 7.5YR-5/3 内面：褐灰 7.5YR-4/2	B	破片	外面：わずかに縄文痕有	黒浜式	
10	縄文土器	-	-	-	D	外面：にぶい橙 7.5YR-6/4 内面：褐灰 7.5YR-4/1	B	破片	羽状縄文系 下位に波状文有	黒浜式	
11	縄文土器	-	-	-	DIN	にぶい黄褐 10YR-5/4	B	破片	外面：LR単節縄文有	黒浜式	
12	縄文土器	-	-	-	D	外面：灰褐 5YR-5/2 内面：にぶい橙 7.5YR-7/4	B	破片	縄文を施した上から、鋸歯文を縦位に施す	関山式	
13	縄文土器 浅鉢	-	-	-	DM	橙 5YR-6/6	B	破片	内外面とも無文 内面一部ミガキ痕有	加曾利 E	
14	縄文土器	-	-	-	BDHKM	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	破片	外面：LR単節縄文痕施文	加曾利 E	
15	縄文土器	-	-	-	DHNO	橙 7.5YR-7/6	B	破片	外面：縄文を施した上段に櫛描による沈線有	諸磯式	
16	弥生土器 甕	-	(6.3)	13.0	ABDEIKMO	橙 7.5YR-7/6	B	脚部 50%	口舌部に縄目状の刻み有		
17	弥生土器	-	-	-	ABC	にぶい黄橙 7.5YR-7/4	B	破片	赤彩あり 突帯部2箇所有（同一工具による刻み）		
18	土師器 坏	(13.6)	(2.9)	-	ABDIK	明赤褐 5YR-5/8	B	口縁部 10%	模倣坏		
19	須恵器 坏	12.2	(3.1)	-	ABI	外面：黄灰 2.5Y-5/1 内面：灰黄 2.5Y-6/2	B	口縁部～体部 100%		南比企産	
20	須恵器 碗	(12.2)	(3.2)	-	AB	灰 7.5Y-5/1	B	口縁部 10%	内外面：回転ナデ痕	南比企産	
21	須恵器 碗	-	(4.9)	(5.8)	AC	灰白 2.5Y-7/1	B	体部～底部 30%	内外面：回転ナデ痕 仏具か？		
22	土師器 甕	-	-	-	ABCI	橙 7.5YR-7/6	B	口縁部破片	外面：ハケ目による調整痕有		
23	土師器 甕	-	-	-	ABCI	橙 7.5YR-7/6	B	口縁部破片			
24	須恵器 高盤	-	-	-	ABI	黄灰 2.5Y-4/1	B	胴部破片	内外面：回転ナデ痕	南比企産	
25	須恵器 甕	-	-	-	AM	外面：褐灰 10YR-5/1 内面：にぶい褐 7.5YR-5/3	A	体部破片	外面：平行叩き目痕後ナデ調整 内面：同心円状工具による叩き痕	末野産か？	
26	須恵器 高坏	-	-	-	AD	黄灰 2.5Y-5/1	B	脚部破片	「すかし」有		
27	玉斧	最大長 (6.4) cm、最大幅 5.4 cm、最大厚 1.3 cm、重量 83g								全面すり痕有	(硬玉) ヒスイ輝石
28	石製品 穴掘り用	最大長 13.4 cm、最大幅 6.5 cm、最大厚 2.0 cm、重量 341g								裏面一部にすり痕有	片岩？
29	石製品	最大長 (10.3) cm、最大幅 (5.7) cm、最大厚 2.0 cm、重量 167g								裏表面にすり痕有	砂岩



第12図 遺構外出土遺物（2）

V 調査のまとめ

今回の調査では20㎡の面積であるが、3軒もの住居跡を確認することができた。調査の結果、B区の第1号住居跡は調査箇所全面が住居跡で、北壁付近にカマドそでを確認することができ、北向きのカマドを備えた住居であったことが分かる。出土遺物から、平安時代の坏、甕が確認でき、大体8世紀～9世紀ごろの時期であった。

床面を剥ぐと、床面はきれいな平坦であり、凹凸の地表面に粘質の土を敷き、床を平らに整形したものだとは推察される。

また、この住居跡の床面よりさらに下から、第3号住居跡が確認できた。検出範囲は極めて小さいことから全様を判断できず、時期を判断できる遺物の検出がなかったため、詳細は不明である。しかし、その遺構の様相からおそらく7世紀末ごろの住居跡と推測している。

続いて、A区での第2号住居跡は、調査箇所の西側に検出され、その内住居跡からは縄文土器の甕、壺片が確認できた。住居跡は、全体の25%程度の検出にとどまっており、それ以外は調査区域外に位置し、調査区の北西に展開するものと考えられる。遺構内からは柱穴も確認でき、直径30cm程度、深さが50cmのピット状の落ち込みであり、そのことから、比較的規模が大きなものであったことが想定できる。

出土遺物は破片が多いが、縄文時代前期から中期の破片が多数であることから、この住居跡はその時期のものであることが推察できる。

また、今回の調査前の事前の試掘調査時に硬玉の玉斧を検出することができた。おそらくは実際の使用目的で作成されたものではなく、儀礼などの使用目的と推察され、貴重な品を得ることができた有力

な首長が存在する集落があったことが想像できる。今後、その裏付けとなる調査を期待したい。

以上、この調査区域では縄文時代と平安時代の遺構が確認され、遺物からは弥生時代のものも確認されたことから、縄文時代から平安時代にかけて定住していたことが分かる。今回の調査を経て、時代背景などにも注視しつつ、今後検討していくとともに、今回の調査地域は過去に調査事例のない希薄な部分であったために、貴重な情報を得ることができた。

引用・参考文献

『熊谷市史』前編 熊谷市 1963

吉野 健 『西別府祭祀遺跡、西別府廃寺、西別府遺跡総括報告書Ⅰ』－西別府官衙遺跡群確認調査報告書Ⅲ－熊谷市教育委員会 2013

金子正之 『石原古墳群第2号墳』熊谷市石原古墳群調査会 2008

蔵持俊輔 『上之古墳群・諏訪木遺跡』熊谷市遺跡調査会 2013

松田 哲 『樋の上遺跡』熊谷市遺跡調査会 2012

松田 哲 『三ヶ尻遺跡Ⅲ』熊谷市教育委員会 2003

新宿区内藤町遺跡調査会 『内藤町遺跡－放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報』

出縄康行 『北廓遺跡』大里村教育委員会 1988

写 真 图 版



B区全景
(第1号住居跡) (南から)



第3号住居跡 (南東から)



第1号ピット (南から)

図版 2



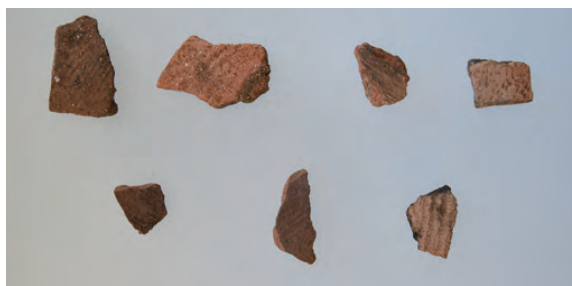
A区全景
(西から)



第2号住居跡 (南から)



発掘作業風景



第6图 1~7



第6图 8. 9



第6图 10~14. 16. 17. 19



第6图 12 (内面)



第6图 26



第6图 34. 37



第6图 24



第6图 21



第6图 35



第6图 22



第6图 36

图版 4



第8图 1~8



第11图 4~10



第11图 11~15



第11图 19



第11图 1



第11图 16



第11图 17



第12图 27 (表)



(裏)

報 告 書 抄 録

ふりがな	きたぐるわいせきに							
書名	北廓遺跡Ⅱ							
副書名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
巻次	—							
シリーズ名	—							
シリーズ番号	第29集							
編集者名	腰塚 博隆							
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会							
所在地	〒360-0107 熊谷市千代329番地 熊谷市立江南文化財センター TEL048-536-5062							
発行年月日	西暦2018(平成30)年3月26日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(°′″)	(°′″)		(㎡)	
きたぐるわいせき 北廓遺跡	くまがやしみのわあざきたぐるわ 熊谷市箕輪字北廓 47番1、48番1の一部	11202	64-018	36° 05′ 20″	139° 24′ 46″	20160926 ～ 20161007	20㎡	浄化槽埋設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
北廓遺跡	集落跡	縄文時代 前期 平安時代	住居跡 3軒 ピット 2基	縄文土器・須恵器・土師器・石器・陶磁器		20㎡という面積でありながら3軒(うち1軒が縄文前期、2軒が平安時代)が検出された。この範囲で3軒も確認されたことから調査箇所周辺は集落が展開する可能性がある。		

埼玉県熊谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第29集

北廓遺跡Ⅱ

平成30年3月26日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／大屋印刷株式会社